

カンキツ「熊本EC12」の幼木期における早期樹冠拡大のための枝梢管理法

「熊本EC12」の2年生苗木では、新梢発生時に主枝・亜主枝先端部と競合する新梢のみを芽かきし、主枝・亜主枝以外の新梢を多く残すことで、側枝を確保しながら樹冠拡大が図られる。本管理によって、強い芽かきを行った樹と比べて主幹周は大きく、主枝長は同等となる。

農業研究センター果樹研究所常緑果樹研究室 (担当者: 佐々木雲海)

研究のねらい

「熊本EC12」は、本県で育成した年内に収穫できる早生カンキツであり、年々栽培面積は増加している。「熊本EC12」の特性として、頂部優勢が強く、先端部以外の芽が動きにくいいため、初結果時に側枝が十分確保できない事例が多く見受けられる。

そこで、本試験では、側枝を確保しながら早期樹冠拡大ができる枝梢管理法を明らかにする。

研究の成果

3本主枝のカラタチ台2年生苗木を2022年3月にほ場へ栽植後、主枝を前年発生した夏梢部分まで切り戻した後、図1の処理を行った結果は以下のとおりである。

1. 処理後(2023年3月)の主幹周は、新梢を多く残した芽かき弱が、芽かき中、芽かき強に比べ大きくなる(表1)。
2. 処理後(2023年3月)の主枝長および亜主枝長は、芽かきの程度による差は見られない(表1)。
3. 処理後(2023年3月)の1主枝当たりの側枝数は、芽かき弱が最も多くなる(表1)。
4. 処理翌年においても、芽かきの程度が軽いほど、主幹周が大きくなる(図2)。

成果の活用面・留意点

1. 主枝(亜主枝)となる新梢は、側枝となる新梢の発生を促すため、10~12葉で摘心しながら樹冠拡大を図る。
2. 新梢発生時に、主枝・亜主枝先端部以外の新梢が発生しなかった場合は、先端1~2芽を切り返し、新梢発生を促す。
3. 主枝・亜主枝先端部の芽かきは、新梢が5cm程度伸びた頃に実施する。芽かきが遅れると新梢の伸びが悪く、樹冠拡大が遅れるため注意する。

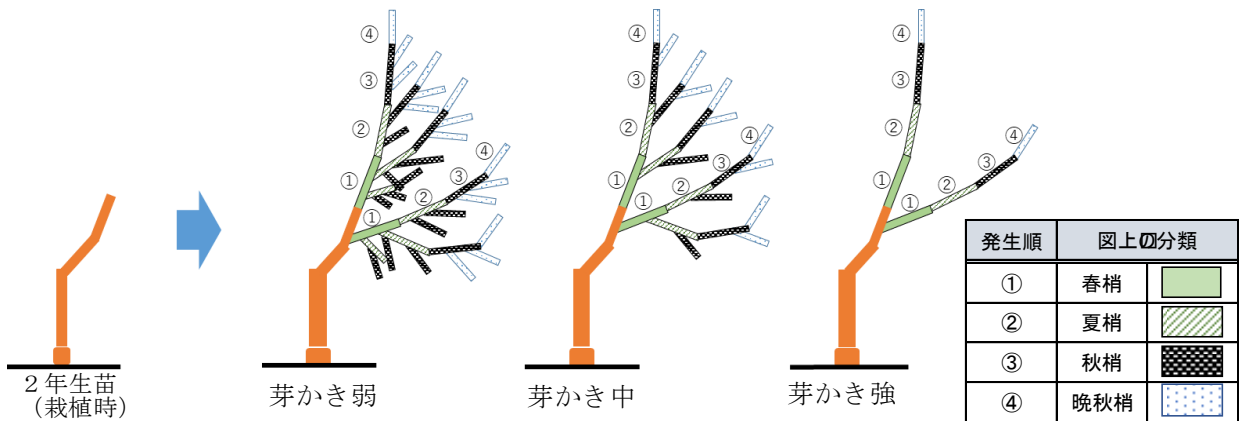


図1 各処理区の新梢管理方法

注1) 芽かき方法

- 芽かき弱：主枝・亜主枝と競合する新梢（複芽と徒長枝）のみ芽かき
- 芽かき中：主枝・亜主枝と①、②、③に新梢1本ずつ残し、残りは芽かき
- 芽かき強：主枝・亜主枝以外は全て芽かき

注2) 新梢は春梢、夏梢、秋梢、晩秋梢の4回発生した

注3) 発生した新梢は①春梢は葉9枚程度、②夏梢、③秋梢、④晩秋梢は葉12枚程度で摘心を行った

表1 新梢管理方法が樹体の生育に及ぼす影響

処理区	主幹周 (cm)		主枝長 (cm) 2023年3月	亜主枝長 (cm) 2023年3月	1主枝当たり側枝数 (本) 2023年3月
	処理前 2022年7月	処理後 2023年3月			
芽かき 弱	5.2	7.8a	115.7	80.0	4.1
芽かき 中	5.1	7.4ab	115.6	75.0	2.0
芽かき 強	5.2	7.1b	119.1	76.7	0.0
有意性	n. s	*	n. s	n. s	-

注1) 主幹周は接ぎ木部の上部10cmを測定

注2) アルファベットの異なる文字間には Tukey の多重比較による有意差有り (5%)

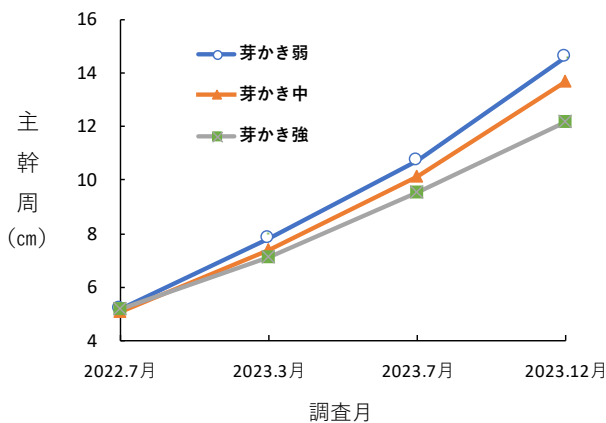


図2 枝梢管理方法が主幹周に及ぼす影響

注1) 2023年3月の調査後にせん定を実施した
芽かき弱、芽かき中は晩秋梢部分をせん除、
芽かき強は秋梢部分をせん除した

注2) 2023年4月以降の新梢管理は春梢発生時のみ、
1節1新梢に整理した



図3 芽かき弱の樹体の様子 (2023年10月)